
国の獲り合戦

襟立 とびお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国の獲り合戦

【Nコード】

N6225B

【作者名】

襟立 とびお

【あらすじ】

国崎住人の何気ない日常にふと現れた少女・真弓。学園生活を送る住人に妙に懐いて来る真弓は何を狙っているのか。書いている本人すら展開がアヤフヤ?! 筆者の筆運に賭ける第二小説だっ

さあ人形劇のはじまりだ！ - その1（前書き）

ご購入ありがとうございます。

お戯れと思って見てください^^；

某SNSでネタ提供を募ったら「パンツの少女が結婚してください
と言った」という訳の解らない展開から発想した物です（笑）

突発的な作品ほど可愛いってヤツですかね（笑）

ではどうぞ^^

さあ人形劇のはじまりだ！ - その1

ウチの高校は小・中とエスカレーター式に入学できる進学校。

そんな楽な所に惹かれたのかどうか知らないが、俺は、保育園児時代には塾や英会話など、遊ぶ暇も無いくらいに勉強をさせられた。その介もあつてか、今現在に至る。

その状況がコレ。

・・・何故か隣には見知らぬ女の子が居る。

俺にはこの子が何をしたいのか、何を期待しているのか、何を考えているかなんてちつとも思いつかない。

唯一浮かぶのが、

—— 凄い歩きにくい

女の子は俺のシャツの端をチョコンと指で摘んでいる。俺が歩くと女の子は当然くっついて来るのだが、少しでも速く歩くと小さい声で「あ・・・」という、シャツを引っ張るのだ。その度に首元が絞まって敵わない。

そもそも何でこうなったのかすら解らない。

先に言っておくが俺は「何もしていない」ぞ！

説明――

ウチの高校は先も言ったようにエスカレータ式の進学校。

そして、その校舎の外見は横に広い三階建てだ。一階に俺らの高等部、二階に中等部、三階に小学部がある。俺ら以外の学部は全て、必ず高等部の廊下を歩き、階段を上がるという造り。

セキュリティ的にもオコチャマ方には安全。なんてったって上級生が守るんだからな。

俺らはどうでもいいのかよ、って感じだけど・・・。

俺はいつもの時間、いつもの道、いつもの面子で教室に向かった。

しかし、今日に限って便意を催してしまったんだ。

「悪い、ちと先にいってくれ」

と、トイレを指を差し俺は用をたしに行った。

スツキリしたところで教室に向かうのだが、どうやら今の流れはさつきと違って中等部が多い。

「やべっ。時間ギリギリかも」

俺は少し焦ったが、焦ったところでどうにもならないので堂々としてこうと腹をくくった。そんな矢先だった。

たまたま見上げたところが階段で、たまたまその階段を上ってたのが女の子で、たまたまその子のスカートの中がみえてしまった。

というか、言わせて貰えば言い訳になるかもしれないが、

焦点は合ってなかったからな！

そしたら、その女の子がいきなり振り向いてこっちに来たんだ。

正面に立つや否や、

「せ、責任とってお嫁に貰ってください・・・」

だってさ・・・。しばらく止った後、俺は慌てちゃったよ。

つーか有り得ないだろ。

「・・・え？ は、はあ・・・」

ワケ解らんから生返事してしまったが、それを聞くと女の子は駆け足で階段を上っちゃったワケ。当然見えるわけで、今度は焦点が合

ってただけど・・・。

そんな摩訶不思議な朝を向かえ、勉強は勉強で無くなり全くの上の空。

唯一覚えているのが友達との会話で、中等部に可愛い子が居る、という事だけだった。

「その子がめっちゃくちゃ可愛くてさ。俺と二個しか変わらないわけだから・・・」

そっぴやあの子も結構可愛かったなあ。うる覚えだけどさ。

——キンコンカンコーン

・ 終業の鐘がなり中身の無い一日を終え、いざ教室の扉を開けると・・

なんだ、なんでココに？

朝に会ったパンツの女の子がソコにいたんだ。

え？だって名前知らないし。

「あ、ゴメン。ちょっと退いてくれるかな？」

どうせ俺に用事ってわけじゃないだろ。有ったとしてもここじゃマズイし。

急いで、その子を横目に教室を抜けようとしたら、何かに引つ張られてたんだ。

「あ、あの・・・」

その子は俺の袖をつかんでいた。しかし、その一言で黙ってしまった。

俺はそれなりに背丈は低い方だけど、顔を伏せた女の子を見るにはちょっと背が高いらしい。何か言いかけてただけに続きが気になる。

伏せた顔を覗くように女の子を見た。

正直驚いた。今まで妄想してた女の子とは違って本人は遥かに可愛かった。

するとクラスの野郎一匹が騒ぎ出したんだ。

「おいアレ！休み時間言つた中等部の・・・」

何か聞こえるけど、どうやらそうらしい。

で、そのめちゃくちゃ可愛い子が俺に何の用なんだ？

もしかしてチクリに来たのか・・・？別に変な事したわけじゃないけど、嫌な感じ。変な汗が出てきそう…。

「あ、あの！」

「・・・え？俺？」

ワザとらしく振舞った。

「で、出来たらで良いんですけど・・・一緒に帰りませんか」

・・・。

思い起こせば16年と10ヶ月。

あれやれこれやれと勉強に明け暮れ、教室では男友達と話をしていくだけで、学校が終わったら塾通いのこの俺に、とうとうこの日が来てしまった。

【春】

——春には始まりの意味を持たせる場合もある。

また、春から初夏にかけてを木の芽時とも言い、性的活動が盛んになるものとされている。「春にはおかしな行動をとる人が増える」とも言われ、そのような行動をとるものは俗に「春な人」「頭が春な人」と呼ばれることがある。

あ、これじゃない！

【春】

——恋愛の始まり。長くに渡って恋人が居ない人が使う言葉。
使い方としては「俺にもとうとう春が来た」などがある。

実際こういう場面にあうとは思わなかった。

そんなこんなで一緒に帰ることになった。

——説明終了

ワケが解らないままここまで来ちゃったけど、随分浮かれてたし気付きもしなかったけど、

一緒に帰って何するんだろう

話することあるのか

そもそも名前も知らないし

と色々ある。

終始ニヤケ顔の俺も気持ち悪い。そう考えると急に冷めるなあ。

「あ、君？僕は君の事なんて呼べばいいのかな？」

とりあえず沈黙は避けたい。

「す、すいません・・・あの、真弓^{まゆみ}って呼んで下さい、住人さん」

「そか、真弓ちゃ・・・ん？」

「どうかしたんですか？住人さん」

「あ、いやちよつと・・・あ、僕の名前知ってるの？」

「え？あ、あ・・・さっき言ってくれましたから」

「あれ、そうっただっけ？（あれ？名乗った覚えはないけど・・・俺早くもボケた？）」

グイッと引っ張られた。歩くの速かったかな？

「そうそう真弓ちゃんって今いくつなの？」

などと、他愛も無い話で歩くとふと気付いた。

「真弓ちゃん家ってどっち行くの？」

ちょうどY字路の所で聞いてみると、どうやら右の方に行くらしい。
可愛らしく指を差してらい。

「そうか、んじゃここでお別れだね。んじゃまたあし．．．」

駆け出そうとする俺を、真弓は抱きつくように引き止めた。

「え．．．？」

さあ人形劇のはじまりだ！ - その1（後書き）

お疲れ様でした。

早速、作品に触れますね。

同時期に「涼宮ハルヒ」のアニメ版を見ていたので、主人公の主観が先行した作品となっています。

こういう風なものもありますが、感想文チックなんでこういう路線は避けたいなあと思ってたり^^；

ただ、従来の作風とは別の視点から書いてみるというのも楽しいものです。今後はこういう主人公視点、または周りの視点も表現出来るようになるのが目標ですね。

因みにこれは前書き通りで、ネタ提供されたもので、最終的には「18禁に持つて行け」と言われましたが、僕じゃそんな度胸出ませんでした（笑）

よってオチは期待しないで下さい（爆）

では次回もお楽しみに♪

さあ人形劇のはじまりだ！ - その2

「・・・え？」

必死にしがみ付く真弓が上目遣いに俺を見る。

何か言っているような気がする。案の定上手く聞き取れない。

「あ・・・ご、ごめんなさいっ！」

そういうと慌てて手を離す。真弓の顔が仄かに染まっている。

「あ・・・んと、俺こっちの道行くけど・・・？」

何か照れくさい。多分俺顔真っ赤だな。

住人は足掻きよつの無い気持ちのせいか頬を掻く。

「あの、住人さん」

「はい、なんでしょう」

なんで敬語なんだよ。しかも声上ずった。

「住人さんの・・・その・・・」

モジモジしている真弓が妙に可愛いく見えるのは・・・

——恋と言うものなのだろうか！

苦節16年と10ヶ月16時間。

今見える夕日が綺麗なのは、俺の心が充実しているせいなのだろう！

ふふっ・・・青春万歳。

そう、俺はここで言うんだ。そう、爽やかに「また明日」って。

そうしたら、きっと明日からも楽しい日が続くんだ。

これからの人生はバラ色だあっ♪

・・・

「また明日！」

駆け出す俺。それを見送る真弓が一言、

——また明日も会えますよね

精一杯声を出す姿が可愛い。

「うん、明日も一緒に」

「あつ！・・・待ってください」

そういうと真弓が俺の後を追ってきた。それを見た俺は近寄らずにはいられなかった。

「どっしっ・・・」

俺が言い終わる前に真弓の唇が俺の頬を撫でた。

「わっ、忘れ物です・・・！」

そういつとペコリとお辞儀をして逃げるように行ってしまった。

・・・

なーんてなるんだよきつと！おいおい今日の俺サイコーだぜ！

さあ言っんだ俺。

「んじゃ、まっ・・・」

「・・・住人さんのお部屋に行っても良いですか！」

「・・・（た明日）」

キメ台詞がふいになった。

ま、まあ予想外も予想外だし、想定外も良い所だよ。

「・・・え？ は、はあ・・・」

なんとも間抜けな声だ。

自分で言うのもなんだけど、もっと気の利いた応え方があるだろ。

「え〜と・・・俺は別に構わないけど、真弓ちゃんはだいじょ・・・」

俺の腕にしがみつくようにしていた真弓が、今は抱くような形になった。

当然そんな状態なんで胸が当たりますよね〜あはは、真弓ちゃんって案外グラマーなのね。

「じゃあちよつと歩くけど俺の部屋に行く？」

コクつと頷く真弓の瞳は、夕焼けに照らされて綺麗に輝いていた。

「そ、そんなに力を入れなくて俺はどこにも行かないよ」

少しだけ歩いたんだけど・・・これって恥ずかしい。

流石にこのまま歩くのも恥ずかしいので、実に残念だが、実に口惜しいが、残りの道はせめて手を握るくらいで歩こうと思ったんだけど…。

「・・・私がこうしていたいんです」

そういうと顔を伏せた。伏せる瞬間、また顔が真っ赤になったのが少しだけ見えた。

ギュッと抱きつく真弓。

チクショー可愛いぜ真弓ちゃん！もうこの服は洗わねえ！

腕を組み雑談をしながら歩く夕焼け空の下。

この時間がもつと続けば良いのに。そう思ってたところなんだがどうやらお終いの様だ。

このままずっと歩こうかな。

「・・・着きましたよ。住人さん家」

「へえーここが俺の家かー、ってなんで知ってるの?！」

ナイスノリツツコミ。

「あ・・・。だってここに【国崎】って表札たってますから」

指を差す先には、これまさに、と言わんばかりに表札が立っていた。

とうとうこの日が来たか。

男友達すら引き入れた事の無い領域―俺の部屋―。

その歴史に新しくページを入れるときが・・・そう、今日だ！

・・・と、ちよつと待てよ？

俺の部屋が見たい。イコール・・・どういう事だ？

おいおい。まさかだろ？この子に限ってそれはないだろ。

付け上がるんじゃないぞ俺。煩惱爆発じゃないか。

ふと視線を下げると真弓と目が合った。

その瞬間、真弓の顔がささやかだけど微笑んだように見えた。

・・・まさかだろ真弓ちゃん！

続く！

さあ人形劇のはじまりだ！ - その3（前書き）

前回までのあらすじ

「・・・っ！まだかつ！」

叫ぶ劉備蟹徳に襲い掛かる魏兵。

「あと少し・・・あと少しです！」

——東南の風より風が吹きます

「今宵は無風。この火計成功なり！」

「いいえ。この戦、私たちの勝ちです」

片手に扇子を持った諸葛住人が小高い丘より姿を表した。

刹那、一陣の強風が吹いたという――

嘘です！本編とは関係有りません（笑

さあ人形劇のはじまりだ！ - その3

「・・・俺の部屋汚いから、入るときはゆっくりお願いします」

何言ってんだろ俺。

恥ずかしげに頷いた真弓は住人の腕をしっかりと抱いた。

「・・・ただいま」

返事はない。よし、誰も居ない。

住人の部屋は二階にあり、玄関付近になる合計30段の階段を上がると直ぐ左に位置している。

「ここ、俺の部屋。散らかってるからちょっと待ってて」

「あ・・・大丈夫ですよ気にしません」

「けど本当に汚いから・・・」

「いつもの住人さんの部屋で良いですよ」

笑う顔が可愛かった。俺ってこの顔に弱いんだな。

「じゃ、中で待ってて。俺、ちょっと下行って来るから」

真弓はコクツッと頷いた。

こういつときどうしたらいいか解らないけど、常識的にお茶を用意するだろう。

ちよいと冷蔵庫でも漁ってみるか。

「おかえり」

「うおっ！」

キッチンの奥のほうから声が聞こえた。

「亜居、居るなら居るって言えよ！」

国崎^{くにさき}亜居^{あい}。住人の2つ違いの妹で今は中学校3年生。

「・・・で、何してるんだよ？」

こちらにお尻を向けて、奥の方でなにやらゴソゴソとしているのが見えた。

「んゝちよつとねえゝ」

何を探すのは勝手にしてもいいが、それにしても・・・

「毎度なんだが、服ぐらい着ろよ。お前帰ってきてから何時間もしてないだろ」

そう妹の亜居は普段家では服を着ない、といっても下着は着けるくらいで家中を動き回る。

「だってこの方が楽なんだもんゝ」

「楽だとしてもさ・・・」

今、真弓ちゃんいるのにこの格好でうろつかれても。

「あ！あつたあゝ」

取り出しますは、虹色に光る孫の手。

孫の手ってキッチンの奥から見つかるもんなんだな・・・俺ビックリしちゃったよ。

「良かったですねー。んじやお茶貰っていくよ」

冷蔵庫から取り出しますはお茶【貢献美茶】だ。我が家ではよく食すお茶である。

「あ。あと、今日の夕飯は勝手に食うから一人で食っててくれ」

「何かするのゝ?」

亜居が不思議そうにコツチを見てきた。

「ふっ・・・オコチャマな亜居には教えません」

これといって理由が思いつかなかった。ま、これで大丈夫だろ。

「ぶ〜！亜居はもう子供じゃ有りません〜」

「・・・どこが」

ジタバタする亜居に、思わず真顔で応えてしまった。

「そうねえ〜・・・」

亜居がキヨロキヨロと辺りを見てから手を叩いた。

「例えばあこれとか〜？」

いきなり迫られて、胸の谷間を強調させたポーズを取られた。

目測だがCカップくらいあるんだろうか。うん、多分そんな気がする。

これが真弓ちゃんなら良かったのだが、実の妹なると逆にムカついてくる。まあ友達の蟹谷は喜ぶんだろうけど・・・あいつロリコンだからなあ。

あ、俺も真弓ちゃん好きだからロリコンなんだろうか。なんか【類

は友を呼ぶ】って感じ。

「・・・ちょ、ちょっと黙らないでよー兄貴ー」

変なポーズを取った直後に俺が黙ったのが結構効いたらしい。

赤らんだ顔で亜居は牛乳を一気飲みした。

「わりい他の事考えてた。とりあえず、まだまだ子供だな」

そういうと、住人は逃げるように自分の部屋に向かった。

閉まるドアの音の後には亜居の叫ぶ声が聞こえたが、まあいつもの事という事で・・・。

やばっ。結構時間かけちゃったかな。

「うめんください」

自分の部屋だっつーの。

「どつぞ」

真弓ちゃん、返事するのかよ。

「ごめん、待った？お茶がなかなか見付からなくて」

「別に気を使わなくても良かったのに」

大丈夫大丈夫、と住人はコップにお茶を注いだ。

「あはは・・・結構荒れてるでしょ俺の部屋」

本棚には書物が並べられているが、それに入りきらなかった本などはその辺に乱雑に置かれていた。他にも、趣味の【ミニ観葉植物】、色々なデータが入ってるパソコンやデジカメで撮影した風景写真など、辺り狭しと置かれている。

「写真とかお好きなんですか？」

それから色々話をした。家族の話とか最近あった面白い話とか、ときどき笑ったり驚いたりといった間に時間が過ぎた。

「・・・なんか暑くないですか？」

真弓ちゃん、なんか顔が赤いなあ。

「そういえば暑いかも。真弓ちゃん大丈夫？顔が赤いよ」

「大丈夫ですよ」

へらへらと笑う真弓。・・・なんかオカシくねえ？

「ちよつとごめん」

立とうとしたら脚に力が入らず思わずよろけてしまった。

そついやヤケに周りがぼやけるなあ。

「住人さんこそ大丈夫う？」

「OKOK。ちよつと窓開けるね」

「あ・・・！窓はだいじよ・・・」

ドアに手をかけようと手を伸ばした瞬間、真弓が住人に倒れこんだ。

「うあつ！」

二人はそのままベッドの上に倒れてしまった。

「ごめんなさい。大丈夫ですか」

「俺はだいじょう．．．」

ベットに仰向けになっている住人に、覆いかぶさるように真弓が四つんばいの格好で目をパチクリさせていた。よく見たら、真弓がほのかに化粧しているのが解った。

「大丈夫さ。（うわ、近い）」

「真弓、さっきからオカシイのお。世界がグ〜ルグルしてる」

「??？」

「そーいえば俺もオカシイ．．．」

ふと見たペットボトルには【壮美献酒】と書かれていた。

そのペットボトルは最初に俺が持ってきたお茶だった。

——あ

嫌な予感。

さつきから変わらない体勢のまま、真弓が首をかしげて反応した。

「ごめん・・・」

「ん？」

「俺、お茶と間違えてお酒もって来ちゃった」

「えゝ？！私お酒飲んじやったんですか？」

「あははは、ごめん・・・」

頭に手を当てて苦笑いする俺。

それを見た真弓がつられる様に笑う。

「住人さんオカシイねすよ〜お茶とお酒って・・・ふふふ」

「だからゴメンだつて」

和やかな雰囲気。しばらくすると二人は笑い疲れたのか少し黙ってしまった。

「ふ〜。あ、もうこんな時間、どうす・・・」

うお！

「真弓、暑いねす〜」

そう言った真弓は、制服のブラウスの胸元を広げパタパタと扇いでいた。

ソコから見える胸元は住人には眩しく見えた。

「（あ〜もつと扇いで〜）」

そんな目線を感じたのか真弓は後を向いてしまった。

「・・・住人さんのエッチ」

「あはは、ごめん。つい・・・ね」

しまった。つい見惚れてしまったよ。

照れ隠しで頭を掻いている住人。

しばらくの沈黙が続いた。

沈黙が耐えられなくなった住人は、何処を見るでもなく窓を覗いた。

そこには真弓の顔が淡く映っていた。

ただ何となく手を伸ばしてみたが、触れるのはガラスでやはり温もりは無かった。

その冷たさが伝わると住人は急に心細くなった。

俺、やってんだろ。

先程からの自分じゃない自分が住人を掻き乱す。

このままで良いのだろうか？

そう思うと窓にはこちらを見ている真弓が映った。

住人が振り向くと消え入りそんな声で真弓は言った。

「あ・・・その・・・住人さんも・・・」

「ん？」

全然聞き取れなかった。

うゝ酔いもだいぶ冷めてきた筈なんだが、どうも調子が狂う。

「・・・住人さんも興味ありますか」

そういうと真弓はスツと住人に近づいた。今にも吐息が感じられそんな距離。

「な、なににかな？」

やべえよ。やべえよ。冷静になれ！自分。

「私、まだ子供でしょうか・・・」

そついうと真弓は身体を近づけ、グツと顔を近づけ、上目遣いで俺の顔を覗き込んだ。

思わず喉を鳴らす住人。更には襟元から胸元も見え、谷間が露わになっている。住人の心は高まる一方だ。

「そ、そんな事はないけど」

声が上がずる。どうしよう・・・これ以上は俺が俺で居る保証はないぞ。

無言のまま真弓が住人に抱きつく。住人と真弓はそのまま床に倒れた。

初日でコレはダメだ！

おい、いつもの俺よ、早く出てきてくれー！

「私、最初が住人さんで嬉しいです」

そついうと真弓は住人にそつと口付けをした。

さあ人形劇のはじまりだ！ - その4（前書き）

前回までのあらすじは省略して、今回は登場人物紹介。

国崎 住人（くにさき すみひと）：16歳高校二年生

三人兄妹の次兄。最近「視力が落ちてきた」と本気で落ち込む。

成績はクラスでも上位に食い込むほどの勤勉家。学校帰りは週4日で塾。

国崎 亜居（くにさき あい）：14歳中学三年生

住人の妹。スポーツが好きでバレーが得意。

住人とは違い、あまり勉強しないがテストではいつも良い所にいる。

蟹谷 殴（かにや なぐる）：17歳高校二年生

住人と同じクラス。学校では住人とほぼ一緒に行動するロリコン。

Part1で「その子がめちゃくちゃ」と言った人。

飛田 瑞貴（とびた みずき）：17歳高校二年生

住人と同じクラスで蟹谷と住人と一緒に行動する三枚目役。

派手好き。犬の顔のような被り物をいつも着用している。

野来 かえで（のらい かえで）：16歳高校二年生

住人と同じクラス。いつも学ランで登校するが実は女。

男より女にモテて、男より女に好かれる変わった人。

源氏 真弓（げんじ まゆみ）：16歳中学校三年生

双子の妹。姉・真矢と違って性格は大人しい。

霊媒体質。居るはずのない人が見えるとか見えないとか。

現在、住人とお付き合い中?!

源氏 真矢（げんじ まや）：16歳高校一年生

真弓とは双子の姉妹の姉。活発的で姉御肌。意外と我侷。

学年が違うのは誕生日が4 / 1と、真弓の3 / 31と違つたため。

——以後本編——

さあ人形劇のはじまりだ！ - その4

「ん・・・」

真弓の眉が僅かに動いた。

住人はどうしていいか分からず、手先を伸ばしたまま動けない。

「（あわわわわ・・・俺、生まれて初めてだよ）」

真弓は、住人がどうもしようないまま唇を外した。

真弓がうつむき、妙な静けさが辺りを包む。

この空気は・・・さすがに俺が悪い。

「あ、あのさ」

声が上がらず。

「いえ、いいんです。私が・・・」

「違うんだ！違うんだよ」

何が違うんだ、自分に問うも漠然とした答えしか思い浮かばなかった。

だけど唯一ハッキリしている事がある。

——真弓が好きだ

思っけていても声にならない。真弓がここまでしたのに俺は……。

ほどけたブラウスを直している真弓の手が震えていた。

「……！」

住人は何も言わず真弓を抱きしめていた。

「あゝ、めん」

住人が慌てて真弓を離れた。すぐさま真弓が抱きつく。

抱きついた勢いで、二人はベットのの上に倒れてしまった。

変な体勢で倒れたせいで住人の手が下敷きになってしまった。何とか抜け出そうとモゾモゾしていると、それを見た真弓が小さく笑った。

「変な顔・・・」

「え？」

「モゾモゾしている時の顔がおかしかったです」

「そ、そうかな」

あまり釈然としない気持ちだけど、さっきとは違った顔だから良いけど・・・。

「納得いかない！」

「きゃっ」

そういうと住人が真弓と入れ違うように上になった。

「真弓好きだ」

「・・・はい」

今度は住人からキスをした。

少し荒っぽいのが、住人としては仕返しとばかりにした。

「ん・・・」

顔が近いせいか周りが暑く感じる。

頭がポーンとしてきた。

どうやら真弓も同じようで、顔が薄く紅付いていた。

真弓が何かを探すように手を動かしていた。それを見た住人が触るとギョツと握り返した。

それを感じた住人が唇を離すと、真弓が微笑んだ。

やべえ可愛すぎる。思わず魅入ってしまった。

俺がこの子の相手で本当に良かったんだろうか。少し不安でさえあ

る。

そんな気持ちを感じてか、真弓が俺の首元に腕を回し上になった。

「大丈夫ですよ」

そついうと俺の頭を撫でた。

「・・・ッ！ばかつ」

「ふふふ」

子ども扱いするなってえの！っていうか俺の方が年上だつつうの。

住人がそっぽ向いてムクれ面をしていると、馬乗りになっている真弓が、徐にブラウスのボタンを外しはじめた。そんなときだった。

「ーき。兄貴」

妹の亜居だ。よりによってこんなタイミングに・・・！

「あ……！」

「ダメだよ」

口に指を当て甘えるような目で見てきた。
思わず体が固まってしまった。

さあ人形劇のはじまりだ！ - その5

遠くから勢いよく玄関が閉まる音が聞こえる。
それと同時に階段を上る駆け足も聞こえた。

あれ？こっちに来てない？

長い髪にメガネをかけた少女が亜居を通り過ぎる。

住人は迫る真弓を前にして、聞き慣れない騒音に聞き耳を立てた。

ドタドタドタ

「ちよつとどきなさい！」

止った・・・？

部屋の前で止るや否や、聞いた事のある声が扉越しに聞こえる。

「ここね！」

少女は、住人の部屋の前で立っていた亜居に尋ねた。

「え？あ、あの・・・？」

「えい！！！」

亜居の返答を待たず、少女は頷くと住人の部屋を蹴破った。

「成敗！！！」

扉が飛び散る刹那、住人の目の前を何かがかすめた。
運良くそれは住人を外し、ベットに形を残した。

えええええ？！！！！

衝撃の反動がまだあった。

その揺れが収まると住人は窓へと目を馳せた。

真弓ちゃん？！

「お姉ちゃん！」

今にも窓から飛び立ちそうな真弓の姿がそこにはあった。
逃がすか、と少女は腕を振る。すると真弓の動きが止った。

「くっ・・・！」

肌蹴た服が妙に色っぽいが、それどころじゃないようだ。
真弓は苦しそうにジタバタしていた。

目を凝らしてみると何かに巻かれているようだった。

へび？

いや、そんなのどうでもいいわ。兎に角助けないと。
うゝん、何がなんなんやら・・・。

急いで真弓に駆け寄ると、真弓を巻いてるソレを外そうと試みた。

ん？触れない・・・？

目の前の真弓は窮屈そうだが、縛っているものは実体が無いようだ。
しばし住人は考えた。

何かの演技かな？

演技だとしても、他人の部屋の扉を蹴破ってまでリアルに演技する

事も無いだろうな。

この線は薄い。じゃあ、この紐みたいなのは何だ？
ってか俺の扉どうしてくれるんだよ。

住人が考えていると後から腕も掴まれた。

「住人さん！大丈夫でしたか？」

「扉を蹴破った張本人から出る台詞じゃないが・・・」

「すいません・・・けどお姉ちゃんが」

「お姉ちゃん？」

住人が首を傾げると少女は真弓を指差した。

「真弓ちゃんがお姉さん？」

「こっちはお姉ちゃんの真矢。真弓はあたしです」

そついうと少女は自分を指差した。

何言ってるんだこの子は？

そう思った住人は真弓を見た。

見られた真弓は罰が悪そうに顔をそらした。

あれ？よく見ると・・・。

住人は二人を見比べてみた。

少女の顔は、メガネが邪魔でよく見えなかったので外させてもらおうと思った。

「どうぞ」

その行為には意外と抵抗なく、あっさり外させてもらえた。

…どうやら双子らしい。そっくり過ぎる。

「お姉ちゃん、どういう事が説明して？あんまりじゃない、住人さんを騙すような事して」

あんまりじゃない、部屋を蹴破るなんて。

住人は本物の真弓と視線が交わると、少し笑って見せた。

「いや、あの、なんだ。ちょっと、ね」

偽者の真弓・真矢はそういうと少し笑って見せた。

俺に助けを求められても、どうしたものか…。

あの、ボロボロになった扉の方から声が聞こえた。

亜居がポケーとしたまま立っていた。

「どういう事？」

俺に説明して欲しいくらいだよ。

「ああ、兎に角、今忙しいから下行ってて？」

明らかな邪険の仕方だがまあ仕様が無いだろう。出来れば俺も去りたい。

亜居は、わかった、と手に持っているマグカップを渡してきた。それは少し暖かいくらいで、然程温度は感じない程度まで冷め切っ

ていた。

それを感じると住人は、亜居を邪険するのも如何なものかと考えた。

「話が整理したら後で教えるから、下でポチコと遊んでて」

そういうと亜居の頭をポンと叩いた。

そうそう、俺のうちにはポチコという柴犬がいるのだ。もちろん牝。それがもう可愛くて可愛くてさあ、もう最高。目に入れても…

「ヒドイよお姉ちゃん！」

痛くないってくらいスツゲエ可愛くて、絶対人間だったらトップスターだよ。これは間違いない。
今年で2歳になるんだけど…

「良いじゃない！減るもんじゃないんだから」

「だからって寝取るうなんてヒドイよ」

そろそろお年頃かな？って感じだから、俺だったらソッコー告白しちゃうね。

逆に…

「あーら、寝取るなんて人聞きの悪い。住人が私を選んだんだから仕様が無いわよ」

「それは無いよ！だって住人さんはあたしの選んだ人なんだもん」

「でも住人は私を選んだのよ」

「何かの間違いですっ！」

そう逆にコクられたら絶対…って、なんか視線感じるんですけど。

そう思い恐る恐る二人の方を見ると、二人はこちらを睨んでいた。

「え？あ、…え？」

何コレヤバめな雰囲気。

住人の手には嫌な汗がにじんだ。

普通に生活しているの人間が、生命の危機を感じることは日常生活ではアリエナイと思っていた。

今日は記念すべき日なんだなあ、と住人は若干意識が飛んだのが解った。

さあ人形劇のはじまりだ！ - その6

迫りくる二人に気圧され、住人は思わず尻餅をついてしまった。

ひいマヂこええ…。

「私の方が絶対良いからっ！」

「あたしの方ですっ！」

何がいいんだよ、思わずツツコミそうになったがあえてココは言わないで置こう。

何故なら俺が危ないからだ。

突然言い合う二人は、住人の両脚をしっかりと掴んだ。

なぬっ？この俺が脚を掴まれるだとう？！

そんな悠長に構えているほど、それは待ってくれなかった。

!!!

「痛い！痛い痛いっ！！」

「ってか、なんで脚？！」

股間に疾る痛みは想像を絶し、よくこれで赤ちゃんが数分保ってた、と感心するほど。

まあ最後には裂けるんだけど…冗談じゃねえ。

「ちょ、ちょっと離しっ…てててっ！裂けるっ。マジ裂けるって
！」

「お姉ちゃん、住人さんが痛がつてるわ。早く離してよ」

「貴方が離せば良い話でしょ？」

「んー！」

刺激は増すばかりで、住人は本気で裂けたと思ったのが数分前。これを解決したのは妹の亜居で、流石に感謝の意に値した。

「ぐ、ぐう…」

住人の声無き声が上がらず。

「お、お兄ちゃん！」

消え失せる意識の片隅に、ポチコと亜居の姿が微かに見えた。

おゝ我が愛犬よ。こんな不甲斐無い飼い主でスマンかった…。

「ひゃ！犬！！」

意識が飛ぶ刹那、悲鳴とも取れる声と共に真矢が手を離れた。釣り合っていた力は均衡をなくし、真弓の方へと流れていった。

ワンワン、とポチコは真矢に吠えた。

「あ、ポチコ待ちなさい」

逃げ惑う真矢を追うポチコを追う亜居。

踏み荒らされる本。

ひっくり返るゴミ箱。

部屋はめちゃくちゃだ。

「大丈夫ですか？住人さん」

どうやら真弓が俺を受け止めたようだな。

運良くというか…元凶が元凶だけにあまり嬉しくないが、ムツツリ色魔の俺としては、コレはコレでおいしいなあ。受け止められた衝撃で住人は運良くも、真弓のクッションにお世話になっていた。

「もう嫌・・・っ」

―

「ここんどこ、Xが二乗されると」

カツカツっというチヨークの音を聞きながら昨日の事を思い返して

みた。

正直、あれから先のことは意識が飛んでいて記憶が無い。しかし、目が覚めたとき枕元にあった置手紙と、部屋の片付いた様を見ると真弓ちゃんが片付けて行ってくれた、と記憶しておこう。そうじゃないと色々納得いかない。別に亜居がやってくれてもいいんだけど、色々やつちゃってからごめんなさいで帰るような子じゃないし・・・。とにかくあの子は絶対良い子で純粋なんだから！そして俺の彼女・・・」

あ、でも真矢ちゃんもちよつとイイかな・・・積極的にエロいし・・・。現に先なのは真弓ちゃんなわけだし。

両方・・・は流石にキツイなあ。俺って今モテ期到来中ジャン。

「うへへへ・・・い」

「うあキモっ！」

「どうした。うわ、ヨダレきたねっ！」

「そこの三人、授業の邪魔！廊下でピラミッドやってろ」

「組体操?!」

ま、とりあえず・・・どうしようかな。マチでやべえよこの関係。今日でどうにか出来るってレベルじゃないし。

「まあいいか」

「よくねえよ！何で俺がこんな辱めをつ」

「君らは良いよ元々ヨゴレなんだからさ。僕はどうみても巻き込まれた分際だろ」

殴、瑞貴…何か、こいつらが懐かしく思えてきた。

「俺は今シアワセだぜ。お前らは一生俺の友達だぜ」

「…そんなとびっきりの笑顔されても」

「原因が君なんだからさ」

『真ん中ケツテ—イ』

「3人扇かよ?!」

ま、悩んでも仕方ないか。

とにかく当って砕けろって事で締め!

さあ人形劇のはじまりだ！ - その6（後書き）

これで完結です。はしたねーレベルですいません^^；
気持ち先行でオチがイマイチになりました。

もうオチが無い話は書きません^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6225b/>

国の獲り合戦

2010年10月9日02時59分発行